

ニテストから観察する初年度生の英語力

Freshmen's English Proficiency Examined by Two English Test Results

横浜国立大学 大学教育総合センター

田島 祐規子

キーワード：学士力、英語基礎力、自律学習、学習支援

Keywords: college-level academic proficiency, English proficiency, self-learning, Remedial learning

Abstract

This article examines the scores of TOEFL-ITP and Oba RLG-test taken by 144 freshmen in English classes at Yokohama National University in the 2011 academic year. The examination of the two test scores implies that keys for better English proficiency will be their reading skill and vocabulary size. The examination also suggests that freshmen need a campus-support system that can help them to enhance their English skills by either self-learning or Remedial learning depending on their level of English proficiency.

1. はじめに

横浜国立大学では、1年生全員に対して初年度学期末に TOEFL による英語統一テストの受験を課している。TOEFL は米国留学を目指す学生のための英語力測定テストであるが、総合的な英語の力を測ることができるテストとして国際的な権威と信頼を持つ。本学では英語統一テストにおいて、平成 22 年度までは 500 点を満点とする TOEFL Level 2 を使用していたが、平成 23 年度から Level 1 と呼ばれる TOEFL-ITP に切り替えた。この TOEFL-ITP は、旧来の PBT(Paper-based Test) を団体受験専用を実施するもので、多くの日本の大学や企業においてはプレースメントテスト(能力別編成クラステスト)や英語力測定テストとして利用されている。一方、横浜国立大学名誉教授大場昌也開発の「RLG テスト」は R 語彙(読んでわかる単語)テスト、L 語彙(聞いて分かる単語)テスト、G(文法の基礎知識)テストの三部からなり、約 1 時間程度で実施可能な英語基礎力測定テストとして注目されている。この大場 RLG テストに関する信頼性・妥当性・形成的利用の研究は 2010 年度および 2011 年度において、本学の学生を含める関東圏 3 大学の初年度生を対象におこなわれている。2010 年度の研究では、大場 RLG テストで 110~120 点の得点をした場合、TOEFL-ITP では 470 点以上、TOEIC では 650 点以上のスコアを獲得できる可能性の高いことが示された(加藤・田島・村上・前川浩子、2011)。本学で 2011 年度に英語統一テストが TOEFL-ITP で実施されたことから、ここでは 2011 年度春学期に筆者が担当した学生の TOEFL-ITP と大場 RLG テストの得点結果を比較しつつ、本学初年度生の英語力についての考察・分析を行う。また、その結果から本学の初年度生が強化すべき英語力についても考える。

2. 研究対象となる学生について

研究対象となる学生は、2011 年度春学期の筆者担当クラス英語実習 1LR の 3 クラスと英語実習 1W の 1 クラスの受講生となる。この 4 クラスの所属学部はすべて異なり、またセンター試験結果による学部内での習熟度別編成クラスに

二テストから観察する初年度生の英語力 田島 祐規子

おける上位から下位までの4グループすべてが含まれている。まず、大場 RLG テストを2011年度春学期開始直後に実施した。この時点における学生数は合計161名となっている。TOEFL-ITP は、2011年度末の英語統一テストとして秋学期終了時点に実施された。秋学期には、筆者はこの161名を担当していないので、TOEFL-ITP の得点結果をデータとして後日入手している。次にこの161名から、二年生以上の学生と大場 RLG テスト及び英語統一テスト (TOEFL-ITP) の両テストの得点を持たない学生を除外した。それにより、最終的に144名の学生が本研究での参加者となっている。なお、上・中・下位という位置づけは、あくまで各学部におけるセンター試験得点による英語クラス習熟度編成による位置づけであり、全学的に統一された上・中・下位の位置づけではない。中位グループ層の英語力の幅は大きいと考えられるため、本研究における中位グループのB学部とC学部の2グループの並び順については、後述のTOEFL-ITP 平均点の降順とし、また考察においても、まとめて中位グループとして扱う。4クラス144名の構成は表1の通りとなる。なお、所属学部については便宜上アルファベットで表記する。また、考察については最初にTOEFL-ITP、次に大場 RLG テストの順で行う。

表1 参加者となる学生144名の構成

学部	人数	センター試験による習熟度グループ
A学部	35	上位
B学部	45	中位
C学部	27	
D学部	37	下位

3. TOEFL-ITP の結果

TOEFL-ITP は2012年2月第一週に実施された。初年度生にとっては大学1年目の終了時期となる。試験時間は約115分で、最低310点から最高677点の得点範囲となる。テストは3つのセクションからなり、それぞれリスニング50問(約35分)、文法・作文40問(約25分)、読解50問(約55分)の構成となっている。参加者144名の全体平均点は464.2点の結果となった(表2)。TOEFL-ITP の日本における大学生全体の平均が450点程度といわれていることから、参加者144名の英語力は全国の大学生の平均得点と比較した場合に、やや高いレベルの英語力を備えているといえる。しかし、その平均点を習熟度別グループで並べると、上位グループは498.3点を示す一方で、下位グループは428.1点であり、上位・下位グループについての平均点の差は、ほぼ70点の大差となった。このそれぞれの平均点を日本でよく知られている「英検」の級でだまかに言い換えるならば、上位グループは英検準1~2級周辺に相当し、下位グループは英検準2~3級周辺に位置するとえられる。この上位・下位グループの平均点差を見る限り、本大学の初年度生の英語力を一般化して述べることは適切でないと理解できる。上位グループの学生についてさらに考察を加えると、大学学部レベルでの海外留学におけるTOEFL(PBT)得点の目安が500~550点であることから、この上位グループがその域に達するには英語力がもう一歩不足しているといえる。以上のことから、上位グループと下位グループの英語力をどのように引き上げていくかという点が、本大学における全般的英語力向上の一つの課題になると推察される。参加者144名全体のTOEFL-ITP スコア平均点、得点人数分布は、それぞれ以下の表2、表3および図1の通りとなる。尚、表2におけるL・S/W・RはそれぞれL(Listening) S/W (Structure and Written Expression) R(Reading)を表している。

ニテストから観察する初年度生の英語力 田島 祐規子

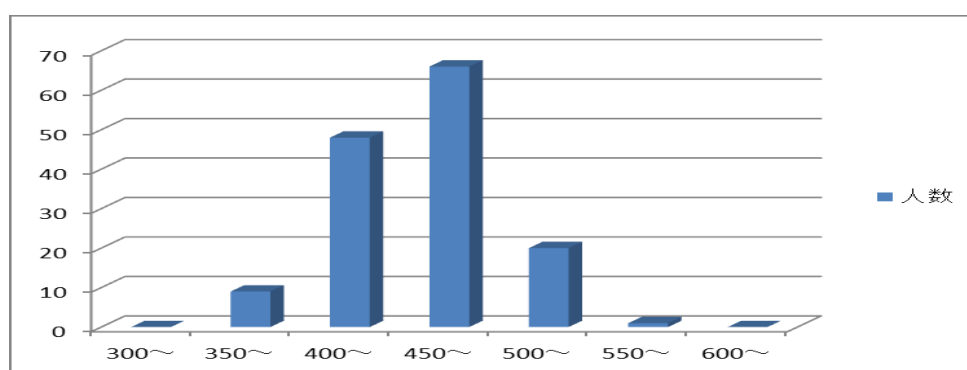
表 2 学部・クラス別 TOEFL-ITP 平均点結果 (全体平均 464.2 点)

学部	クラス	L (68)	S / W(68)	R (67)	TOEFL ITP
A学部 35	上位	47.5	51.6	50.4	498.3
B学部 45	中	45.9	49.1	47.2	474.1
C学部 27		44.3	47.2	46.3	459.5
D学部 37	下位	43.0	44.0	41.4	428.1

表 3 TOEFL-ITP 得点別人数分布

得点	300～	350～	400～	450～	500～	550～	600～
人数	0	9	48	66	20	1	0

図 1 TOEFL-ITP 得点別人数分布



4. 大場 RLG テスト結果

英語基礎力を測る大場昌也開発の「大場 RLG テスト」は(1)R 語彙(読んでわかる単語)テスト、(2)L 語彙(聞いて分かる単語)テスト、(3)G(文法の基礎知識)テストの三部からなる 150 点満点のテストである。(1)の R 語彙では「大学英語教育学会基本語リスト」である JACET 8000 の頻度順 5000 語までから 1000 語レベルごとに 10 単語ずつ、計 50 の単語を選び(50 点満点、15 分)、(2)の L 語彙では同様の方法で JACET8000 の頻度順 4000 語までから計 40 の単語を選び(40 点満点、15 分)、その意味を 4 つの日本語選択肢から選ばせる形をとっている。(3)の G テストの問題構成は A-F の 6 つの文法領域から成っており、各領域から 10 問ずつ出題され合計 60 問となっている。各領域に初級・中級・上級の 3 レベルの問題が組み込まれ、各レベル 20 問ずつあり、領域とレベルの 2 つの面から文法力を分析することが可能である。この 6 領域は大場(2004)の提案するシラバスを基にしている。参加者 144 名の大場 RLG テストの平均点は 150 点満点で 111.4 点を示した。TOEFL-ITP の結果と同様にグループ別に並べてみると上位グループの 121.3 点から下位グループ 98.1 点の幅を示し、上位・下位グループ間の平均点差は 23.2 点となった。一問を 1 点と計算するため、この 23.2 点は全体の約 16%の正答数の違いを示す大差となった。144 名の全体の RLG テスト得点結果、得点人数分布は、それぞれ表 4 および表 5、図 2 の通りとなる。尚、表 4 における R・L・G はそれぞれ R(Reading 語彙) L(Listening 語彙) G(文法の基礎知識)を表している。

二テストから観察する初年度生の英語力 田島 祐規子

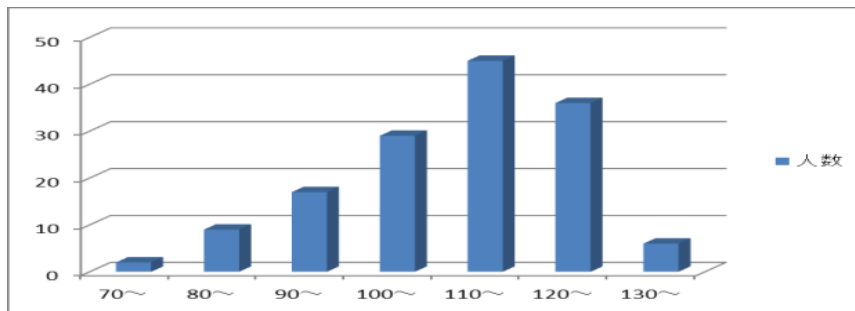
表 4 学部・クラス別 RLG テス 得点結果 ()内は満点の数値

学部	クラス	R(50)	L(40)	G(60)	全体(150)
A学部 35	上位	41.1	29.3	50.9	121.3
B学部 45	中	39.4	27.8	48.7	116.3
C学部 27		37.1	27.0	45.7	109.7
D学部 37	下位	33.7	24.4	39.6	98.1

表 5 RLG テスト合計点 得点別人数分布

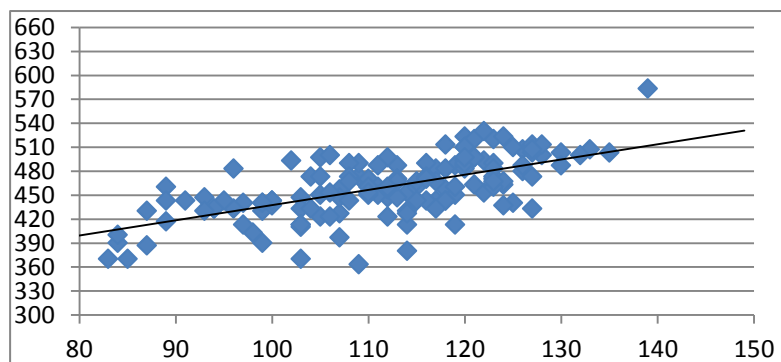
得点	70～	80～	90～	100～	110～	120～	130～
人数	2	9	17	29	45	36	6

図 2 RLG テスト合計点 得点別人数分



最初に紹介したように大場 RLG テストの 2010 年度における研究では、110～120 点の得点は、TOEFL-ITP で 470 点以上、TOEIC で 650 点以上のスコアを獲得できる可能性の高いことが示されている。本研究参加者 144 名の TOEFL-ITP スコアと大場 RLG テストスコアは 0.61 のやや強い相関を示しており、参加者のうち大場 RLG テストで 110～120 点をとった学生は 87 名いた。その 87 名について、110 点以上なら 67%、120 点以上なら 82%の学生が TOEFL-ITP で 470 点以上を取っており、あらためて大場 RLG テスト得点から TOEFL-ITP スコア をある程度正確に予測できることがわかる。以下図 3 は TOEFL-ITP スコアと大場 RLG テストスコアの全体散布図となる。

図 3 TOEFL-ITP スコアと大場 RLG テストスコアの全体散布図



大場 RLG テスト

二テストから観察する初年度生の英語力 田島 祐規子

5. 二つのテスト結果考察

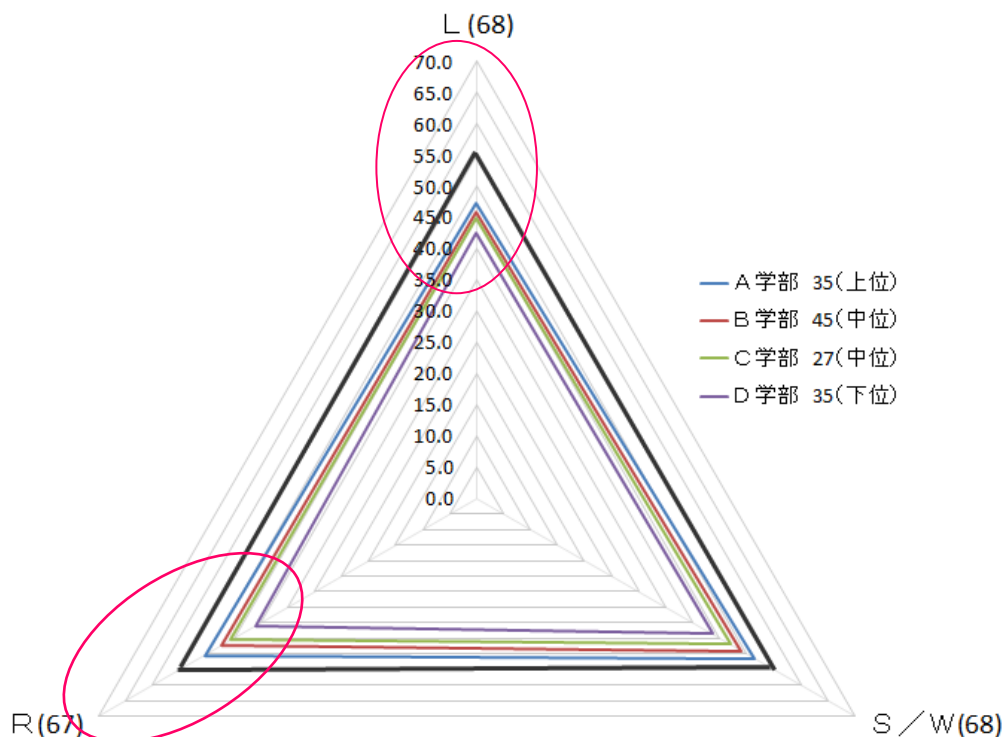
5-1 TOEFL-ITP のスキル別分析

TOEFL-ITP と大場 RLG テストは、いずれも上位グループと下位グループの間に大きな差を示した。初年度初めに実施された大場 RLG テストと同年度末の TOEFL-ITP 受験までにほぼ 10 カ月の期間差がある。その期間中に行われた初年度生用英語授業効果の有無について検証も必要ではあるが、その一方で、各グループにおける学生の英語力のどの部分を強化すべきなのかを考察する必要もある。そこでまず、TOEFL-ITP のセクション別得点結果を表 6 に示し、またその内容を図 4 のレーダーチャートに示した。表 6 および図 4 における L・S/W・R はそれぞれ L(Listening) S/W (Structure and Written Expression) R(Reading) のセクション名を意味している。また、図 4 の中にある黒い太線は海外留学を目指す一つの目安としての 550 点ラインを示している。

表 6 学部・クラス別 TOEFL-ITP 得点結果

学部	クラス	L(68)	S/W(68)	R(67)	TOEFL ITP
A学部 35	上位	47.5	51.6	50.4	498.3
B学部 45	中	45.9	49.1	47.2	474.1
C学部 27		44.3	47.2	46.3	459.5
D学部 35	下位	43.0	44.0	41.4	428.1

図 4 学部・クラス別 TOEFL-ITP セクション別 英語力バランス ※()の中の数字は最大値



上記図 4 から大きく次の3つの特徴を読み取ることが可能と考える。1) 全体的に上のグループが下位グループを包含する形状になっている。つまり、どのセクションにおいてもグループ間で逆転するスキルがないことになる。2) S/W のセクションではほぼ均等な差を示しているが、Listening は他の2つに比べて、各グループ間の差が近接しており、550

二テストから観察する初年度生の英語力 田島 祐規子

点ラインとの差が大きい。3) その一方、Reading では、上・中・下位の差が明確であり、特に下位グループではこの Reading セクションが著しく後退しており三角の形状がバランスを欠いたものになっている。以上の3つの特徴から、本学の初年度生が強化すべき英語力は全体的に Listening であり、また下位を中心として Reading である可能性の高いことが見えてくる。Listening は強化すべきスキルとして常に指摘される傾向にあるが、一般的に大学入試では読解力が重視されるため、本学入学生も英語の4技能の中では Reading は比較的強いといわれている。しかし、この結果を見る限り、本学の学生にあっても、なお Reading 力の強化が必要であると分析できる。

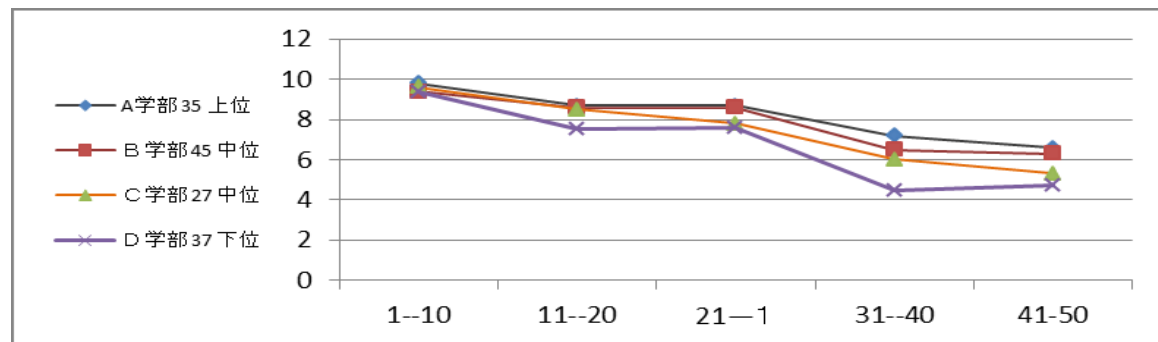
5-2 大場 R 語彙テストから考察する国大生の語彙サイズ

語彙研究で著名な Nation(1990)など多くの語彙研究者が指摘するように、語彙力は英語力を示す一つの指標として捉えられている。つまり Reading 力は語彙力による部分が大きいといえる。このことを念頭におき、大場 RLG テストの R 語彙テストの結果から 144 名の語彙力について考察する。2010 年度の研究(加藤・田島・村上・前川浩子, 2011)において JACET3000 までに中学・高校までの学習目標語彙がほぼ全部含まれていることが確認されている。また、大場(2009)は高校修了時での平均語彙サイズを約 3000 語と設定しているため、JACET3000 までを使用する問 1~30 番の得点結果から高校終了時までには習得が期待される語彙の定着状況を確認することが可能となる。加えて大場(2009)は、難関大学の平均ライン・大学一般教養授業での語彙を 4000 語レベル以上と設定している。以上のことから、R 語彙テストの間 1~30 番、31~40 番、41~50 番の正答率を見ることで、語彙力に関する特徴が観察できると考えられる。参加者 144 名の R 語彙テストの結果を表 7 と 図 5 に示し、上記に基づく分析・考察を行う。

表 7 R 語彙テスト結果

R語彙テスト	グループ	1--10	11--20	21—30	31--40	41-50
A学部 35	上位	9.8	8.7	8.7	7.2	6.6
B学部 45	中位	9.4	8.6	8.6	6.5	6.3
C学部 27	中位	9.6	8.5	7.8	6	5.3
D学部 37	下位	9.4	7.5	7.6	4.5	4.7
		中学教科書	高校初級	高校終了 センター試験	大学受験 大学一般教養初級	難関大学受験 大学一般教養

図 5 R 語彙テスト結果



このRテスト得点結果グラフからは、どのグループも問1~10番については問題なく正答ができていることがわかる。さらに、上・中位グループではそれに続く問11~20番、問21~30番についてもほぼ8割近くを正答している。このことから、上・中位グループは高校終了時点で期待される語彙をほぼ習得できていると判断できる。しかし、この2つの

二テストから観察する初年度生の英語力 田島 祐規子

グループも、問 31-40 以降では一様に右肩下がりに得点が落ちていく。つまり、上・中位グループは全般的に高校までの平均受容語彙サイズは習得しているものの、大場が説明するところの大学生として期待されるべき語彙レベルより上に弱点があると分かる。一方、下位グループについては問 11～20 番の時点で、すでに語彙力に陰りが見え始めて高校修了時点で習得すべき語彙が不安定であることがわかる。また、問 31～40 番で一度「へこみ現象」がみられるが、これは高校の教科書から一気に難易度の高い受験英語用教材に向かった学習の影響ではないかという想像も働き、今後の研究課題としたい。Reading に必要な語彙は受容語彙と呼ばれており (Celce-Murcia, and Olshtain, 2005)、JACET8000 で示すと、日本の大学生は TOEIC では 4000 前後、TOEFL ならば 6000 前後の受容語彙が必要という研究報告がある (Chujo, 2004)。大場 R 語彙テストが受容語彙の測定をした場合、上・中位グループは語彙力増強により TOEIC 高得点を目指すに十分な語彙の準備があるといえるが、TOEFL に対応するためには、より一層語彙強化に取り組まなくてはならないことがわかる。つまり、TOEFL-ITP の結果から見えてくるのは、初年度生で英語力上位層にいる学生の課題は難易度のある語彙の強化ということになる。その一方、下位グループでは高校までに習得すべきレベルの語彙を定着させることが必要であり、これにより TOEIC の受験対応ができると考えられる。

6. Reading と文法基礎力

Reading 力が本物になるか、そこで停滞してしまうかの狭間にいる場合、語彙力の増強とともに、一定の時間内に、一定の量を読み取る力をつける学習が Reading 力強化のためには不可欠であるとよく言われる。このことから、上・中位グループについて提案できるのは、語彙力の強化もさることながら、Reading 量確保のためにも、授業外で自律的に Reading に取り組む機会をもつことだと考える。この自律学習の内容としては、英字新聞・インターネット上の英語ニュース・多読用のリーダーズ・英語の原書や英語論文など、授業用英語教材にとらわれない多様な英語の Reading を多く行うことが含まれる。このような Reading の自律的学習が結果的に語彙増強とともに TOEFL や TOEIC に対応できる「Reading のスタミナ」につながると思われる。下位クラスについては、高校終了時点までに習得すべき語彙が定着していないと思われることから、難易度の高い単語にいきなり取り組むのではなく、JACET2000～3000 語レベル (英検準 2 級から 2 級の語彙レベル) 周辺の基本的語彙をまずは確実にすることが必要と思われる。また、語彙・文法・構文の難易度レベルが調整されている多読用リーダーズなどを活用して、英語を読む経験値を上げることも必要であると思われる。この下位グループについては語彙力の強化もさることながら、基礎文法力の定着も必要と感じる。このグループは TOEFL-ITP の Structure/Written Expression (文法・作文力) で平均点 44.0 点 (約 68 点満点) を示している。この点数は殊の外低い点数ではないと考えられるものの、大場 G テスト (文法の基礎知識) の平均点は 39.6 点 (60 点満点) であった。大場 G テストを過去数年実施してきた経緯から、本学初年度生の平均点は 46 点前後と設定してきているが、それを大幅に下回る平均点を本研究の下位グループは示した。この結果から、このグループが文法の基礎力に問題を持っていることは明らかである。Larsen-Freeman は、文法は単なる知識ではなくむしろ読み・書き・話す・聞くの 4 技能に次ぐ第 5 の技能であると述べている (大場, 2008) との指摘にもあるように、習熟度別クラスでの下位グループについては、高校までの基本語彙習得もさることながら、英語力すべての土台となる文法の基礎力をつけることが不可欠であると感じられる。

7. まとめ

本学では、初年度生の教養英語クラスを、センター試験の得点結果に基づき上、中、下位の習熟度別グループに分ける。ただし、この上位、中位、下位を学部横断的に見た場合、それぞれのグループ名が全く等しい英語力を意味

二テストから観察する初年度生の英語力 田島 祐規子

しているわけではない。A 学部の下位グループが B 学部の中位グループとほぼ同等レベルにあることも、中位グループ層の英語力が学部間で大きく違うことも珍しくはない。近年、中等教育における英語教育の変容、大学入試方法の多様化など、学生の英語力変化と多様化が多く指摘されている。このような背景もあり、習熟度別グループに分けられた本学初年度生の各グループにおける英語力がどのようなものであるかは、実際に授業を始めて学生と対面してみないと分からない場合も多い。しかし、TOEFL-ITP と大場 RLG テストの結果から考察したように、上位グループと下位グループの英語力の違いは明確である。そのため、英語力を考慮せず授業指導が行われるならば、それぞれのグループにおいて授業効果が期待できにくいのは明らかである。本学初年度生については少なくとも授業開始前に適切なプレースメントテストを実施し、各学生集団の英語力に適した授業を提供することが理想であり、必要であると考え。これが最終的に本学生全般の英語力向上につながることを期待する。時間的・予算的制約で大がかりなプレースメントテストの実施が難しい場合には、授業開始直後に大場 RLG テストのように無料でありながら、簡易で信頼性のある英語基礎力測定テストを活用することも可能である。さらに、R 語彙テストの分析において述べたように、上・中位グループの学生が英語力を本物に押し上げたいと考えるならば、教師頼みにならない学生自身による Reading を中心とした自律学習は不可欠である。一方、下位グループについては、教員の指導を受けつつ授業内外で英語を学び直す支援学習が必要である。本研究は、あくまで参加者となった 2011 年度 4 学部初年度生 144 名の二つのテスト結果から見た英語力についての考察である。しかし、すべての分析・考察から、相対的に英語のできる上・中位グループには自律学習を、英語基礎力強化が必要な下位グループには英語学習における支援を、それぞれ可能にする学習環境の整備が必要であると考え。これは、初年度生にとどまらず本学全体において必要な英語学習環境であるとして最後のまとめとしたい。

参考文献

- Celce-Murcia, M., & Olshtain, E. (2001). *Discourse and context in language teaching: A guide for language teachers*. New York: Cambridge University Press.
- Chujo, K. (2004). Measuring vocabulary levels of English textbooks and tests using a BNC lemmatized high frequency word list. In J. Nakamura, N. Inoue, & T. Tabata (Eds.), *English corpora under Japanese eyes* (pp. 231-249). Amsterdam: Rodopi.
- 加藤千博・田島祐規子・村上嘉代子・前川浩子(2011)「RLG テスト」の信頼性と妥当性の検討および形成的利用法に関する研究『中部地区英語教育学会紀要』第 40 号 127-134 頁
- Nation, I.S.P. (Ed.). (1994). *New ways in teaching vocabulary*. Alexandria, VA: TESOL.
- 大場昌也(2004)『学習英文法 2004^T』 2011 年 8 月 8 日検索 <http://www9.ocn.ne.jp/~bigarden/g04jtfrm.html>
- 大場昌也 (2008) 『英語学習の DO'S, DON'T'S, & MAYBE'S』 石川:時鐘舎